

## 理論と実践の橋渡し①～「役に立つ研究」をしたい～

今回から4回のコラムを担当する永作稔です。専門はカウンセリング、臨床心理学です。『「えらぶ」と「なじむ」の心理』を研究していますと伝えることもあります。「えらぶ(選択)」と「なじむ(適応)」、さらに言えばその間に存在する「うつる(移行:transition)」という一連のプロセスを研究テーマとしています。勤務校では、主に公認心理師や臨床心理士などのカウンセラーを目指したい学生の指導にあたっています。そこで心理実習の事前事後指導をしたり、カウンセラーという仕事の実際はこんな仕事だよという講義をしたり(公認心理師の職責という科目です)。そんなことをしていると、今の職務は「えらぶ」と「なじむ」の支援そのものだなと感じます。

さて、私がこの学会に入会したのは大学院生の2年目でした。当時は名称変更前(進路指導学会の時期)でしたが、それから本コラム掲載時点まで、早いもので20年ほどの月日が流れたこととなります。当時の私は研究者として生きていくよりも、実践者、つまりカウンセラーとして生きていく道に魅力を強く感じていました。「実践もできる研究者」ではなく、「研究のできる実践者」として、とくに学校場面で支援を必要としている児童生徒、あるいは保護者や先生方に心理学を活かした支援をして生きていきたいと考えていたのです(20年後に学会で事務局長をしたり理事をしたりすることになっているとは、よもやよもや……)。

そんな私が当時考えていたのは「役に立つ研究」をしたい、ということでした。研究と実践の乖離を縮めて、その間に橋渡しができるような、そんな研究がしたいと考えていました。この「研究をする」という一連のコラムを読んでいる方々のなかにも、同様に感じている学生さんや現場の先生方がいらっしゃるのではないかと思います。

このコラムでは、そんな「実践的で役に立つ研究をしたい」と考えている方を対象に、どんな点に注意していけば、どんな工夫をしていけばそれに近づいていけるのかということをお伝えしていきます。私の研究方法は心理学がベースですが、教育学であっても社会学であっても、共通要素がたくさんあるはず(同じと言い切って良いくらいです)。主として質問紙調査などを用いた量的な研究アプローチをイメージしながら読んでいただくことになると思います。

それでは、今回はここまで。次からは具体的な話をして参ります。お楽しみに。

(十文字学園女子大学教育人文学部心理学科 永作稔)